芳新集

八編

へ5
6493
2

N5
6493
2

潤勝園

序

尾張藩蓬莱文庫

杉井文庫

夏月十雨の君が代乃静まるを仰ける餘り
春迺花を愛し秋の月を翫ひて物の姿心
の應るところ詩と歌り和哥と成り又俳諧
となれり祖翁其俳諧の眞面目の魂を入き得
ひて四風と称し自然の風雅を開発し其
其源流を汲もの四海のうちて金聲玉言外
のあふれるを其妙少れるをそなへ

0101860217 33

玉の泥中に埋んるを愁ひ五伴菴はし
四方の芳吟の新れるを撰ミ芳物集と号
し今年八編を次いとゝ、なぬ是山川隔れ久
しつまき此道を勤たりとゝふべしとおこ
しくも禿筆を採て越中有磯の渚岩瀬の
潤時庵慶里巻の端に誌す

嘉永七甲寅上春

京都帝国大学図書

陸奥のおくも笑えぬ形見哉　杜藻
搜しあて翁矢拔とる木の木　太計麻
獨うそ仙命うしや嚴の色　春尺
ちハ羽を降てもえぬ紅葉　爰跡
四枝ハまる童子殺れ初日哉　柳色
俳ちゝ知ちゝ春ら師花　琢丸
為付て鉢ぬ火桶茶　玉翠

山城

酌まて来て蕾さへ見ぬ　梅色
加茂川の加さき浮ちとり水　梅蒼
恋ゝへて屋の月見る秋きれ　黙郎
未まてはゝえぬ土橋や夜の月　菓蛇
梅一木のこりていく畑哉　雪竹
汐生の尾もうつくし松のうち　素赤
山すゝの木ゝゝ紅葉して柿畑　篤巴
秀たて恋て驚くかしこれ　糸明

沐うゐの一風ゝ赤て猫の恋　丈琴
啼てゝゝ板屋なるや咲の花　芳舟
一天の星ゝ見ゆる秋寒哉　夷亭
落て蕎麦や　桐　ひと祭　袁山
我うゐ一竹千声ゆり杖の孔　訥風
ふゝゝと咲る軒の瓢哉　書舟
何無と風吹て吹ゝを木洩哉　雪尺
炭雪や人の物ひる陰留る　烏谷

新戸出や梅をうたうて裏の山　淡節
色ぶの梅ふるそつむとうぶ芽　始風
川幅の狭服ふいろし時鳥　化男
宵月や一群口枝の山法師　孤柳
萩ちるやうつ人もきえぬ京　玉池
秋うしろ清ふ月やあの時　松雨
きつ居や小屋ぶ水と空　東峰
うめてやひとう居ぶ灯のつ　久海

降出のいそくぬるやかくれ中　也然
神いろ生すぶ鳥やうめのも　石雪
寒柳やロのつよふる枝の伸　盈言
数うけて言をふきまて小社の梅　可真
姫ぶるやゆ流つくりとのぶ稲ぶ　弁川
油先くすへてき蒜や月の舟　烏白
出され月よかるや峯の松　霞田
地平むぶ孝のつ形峰の荒　湖宗

雪ふれや雪数千あぶらふく　月坡
煙りの狂ひ迄ぶり窓　黄雪
引しほる腕の志ぼり　雪路
雪も餅千ぶるはふりや雪の名　之雪
鈴掛て来屠るもちられ　花越
一点仏数ゑとろく恭の名　里秀
ひらもり谷音やて　時秀　向月
咲ゆまいや吟つれて梅炭ひ　頑水

橋を踏へうふ紛やう川蕎　祭典
月見もうふ松ほとり谷の家　蕉宝
の紅葉の色ゑきれて相ゑ　月菊
ゆくはをゑ扇ひろて橋ゆ家　丈庵
涌口を杖てゆくさむ清秀茶　湖風
仏降や一除めゑ川松の色　鹿池
小麦口やうけり梅俊不の門　東壺
黄秀ゑ歌音幸のく天音れ　守秀

かゞ〳〵来て猪い初り寒の水　百可
捨て出る萩の根引や二番咲　素魔
上洛を木こりくて大根賣　奏惜
秋の暮て淋しさまる時百姓　已祝
松ゝきや吹て霧ふり金の音　未丈
〆切傳ふのうらやゆまり寒　柳士
きり詰めきり門上水の下れ　任九
笹分て立やうこうのいと霧　可城

宵捨て毛ちく手殆やふおゆ　芳雄
松九の初へ吹入ゝ〳〵れ　梳乙
傳ふまてといふ泥や義樓　陽鈴
ゆゝしきの怪ふ〳〵えておゝ　芦衆
秋桐年寒つゝ雨ふの羽音弘　湖月
たのんて新〳〵梅木弘　里金
ゝ丈の油ふゝやむ〳〵の声　司丈
殿入や袖笠ふよいゝつき　公成

月々歌よて

梅ハ咲のこゝ千月ハ晴をしゝ　湖南

見殺のよろしい宵しらめの色　其瓢

山水の背と好ゝ梅の花　石高

何年乃新曲をて梅見ゝ　三巴

明てゝゝ屋くのぶや梅ゝゝ　台月

残ゝ雪や月よいや梅の盛　孤峰

真ゝ日も梅ゝ陽ゝ梅の色　養裡　孤南

旅人の登て見るや反木立　美仙

強もきゝおゝゝ梅の深ゝ　今岳

四の高て梅ゝもゝゝや梅の眺め　有弟

今の森ゝ木ゝゝ明ゝ和ゝ　大和　素伯

いゝ梅ゝ見ゝ梅ゝ　洗我

梅も花軒ゝ梅ゝ宵の入　月耕

雇白く明ゝ梅ゝ　桜津　井左

生木たく門りや霧の冬ごもり　徒白
餅の餅を搗かぬ雀や寒いら　糯山
我門へ戻るもぬく阪市茶　柏年
茶菜や宿次まさて祝い出し　知風
囲の見をもれてもちむせ面茶汁　仙爰
忍れていすれのふるもれまこ茶　浪蕉
あ囲て木の茶の波や深川　梅園
建ハ蓼て山るひ〳〵や舟子の声　犠兒

かけむ木や衝の夜舟一夕鴉　素屋
まて女や祇〳〵おとの暮の丈　松濤
立梅やいま無とり井の綿　可蕉
殿へす魚のおんやなさの秋　石叟
好るて分をつるゝむ月　都春
浦波る神の仕やよるの雪　其実
老を好く声も有うてゐるす　可庵
土へさま隆の戦ゐやけちの秋　其山

和泉や心ゝよ浪の多のいろ　松宝

夕涼や寂しまゝなる遠柳　拳一

大根も松ゝとなりて月　太乙

月前雲よかゝるちとり弘　孫人

ゝゝ松や見えぬ門の釘しめり　梅隆

雪や地ひゝてい山の高　岐涯

うくひすの寄まゝ寄すや木の雫　梅直

黄昏の寄れてゆるやゝ乱れ　曲阜

明ぬのやゝきちすやゝの高　まれ女

枝ゆゝしの明てをしむや岳ゝも　枝女

入おをよそよかゝむや山ゝち　仙女

馬をし寄世の杵の片なるよ　古然

すゝの魚や陸るゝのゝ人のゝ　芳月

ゝる枝のかゝるも天ゝ務の毎　和泉　松玉

とりつゝて梅の雪やかゝゝき浪　翠山

志川に住と見ふるの春　伊賀　蕉瓜

名仏のうしろめたく麓の山　伊勢　如擅

道茶や一万ごのる焙の色　和茶

それ鷹の嘴へふるや松の元　武因

素堂に宿る柏子木ふる火桶哉　春門

秋立や服部の法師の粉　雨村

吹くす鷹の和尚のさ嵐　桂子

和尚や赤耳ふるまふの声　素留

名も相をぬぎして立や妻の為　子吟

松明て御ふ法ふるの毋　井桂

吸ふこの消す吹ふれてもの雪　擽迷

見失ふ名の月弟や妻の山　省く

吹ふ名や陰和の為ふる一明り　雪當

田のうもくふい木陰や不志ふ　山友

雲よりえとる蛙の月ふ乳　梅笠

ゆく春や梅い白鷺のゆく雲　王玲
灯ゆらぐ雲のうてて松の月　蕉雨
時あれば月まうしぬ春や池の形　徐水
見元よ新る松風やれすき　山沼
かつらと切口きる西瓜哉　聚静
うめの色春の松のくらい　仙也
いく色も新樹の下のつゆ　示堂
花ゆこの世なの所春炉　只青

波おとる所木の春や雨の原　松青
同月の雲ゆれ雨て梅の春　楠亨
日の暮ゆ命ゆ低る山　松童
時和い田ゆ日ゆ春ゆ雉ゆれ　桔守
和声や一声ゆき教の好　妙月女
庵先い松ゆ小ゆ鶯　雀園
世渡りの雲にゆえ傀儡師　蕉亭
林ゆて一栄するや竹の庭　墨提

孫子の月をかすめて秋と汀　松柏
片羽折れ焦てもうれし火の玉　芝雀
風吹いて雲もつれ来る秋　桃巨
当原は伊勢の嚴の乳　草雨
雲隈の月いうもうてゐる　隙芝
かけすまるまゝ旭や成る者　藻魚
うめつの赤て成ぬ寺の焼　研汀
以巷も服の唐やもるの風　擔君

乱しよ淡きてゐるや初ふよ　叢居
ゆとりて又一ぬや明の苔　巴水
ちるたくをして梅深やあふり　葵影
の月の日のかたはらのいろ　学子
旅ぬくや吹一段空のゆるこ　志膚 不遷

拾為て立を屋ゆり陸乃鳥　尾張 黄山
ゆたりとりて晴て松の門　而后

思ひこのうゑ添てうたをすさまし　梅理
世を来のまゝやうゑ行るのうゑ枯ぬ　一清
明る建て　うゑ魅るひとり笑　鵬居
つ先やえて落る穴の去年落　碌雨
先入をもゝ身して結ぶ去ル　檜水
夕ゝはや頃とよく自よ咲の花　玄玉
彩まてに除立ものゝ宣なの法　文之
刈宗も根のゆるいうそちるゆゝ　李曦

孔のもや一人ふるの人通り　仙来
行ぬて見れい畑や花の中　祢水
竹のゝ里丈くれて夕ゝ　五峰
ゝの梅月ゝ先入見出ゝ　不退
ゆゝしと汐ハ陽来て参連よ　古通
一ちゝゆるや戸口のもゝ　瓶翠
宗因もや枝ぬ蓑の陽る処　芝祝
祝形の風をまゝや汐の薄　玄砂

葉うれも色あらはして蓮の花　色尺
松ぬを戸口に敷て涼みかな　吾声
ほのぼのとあけの雲や岩の色　庵甫
蛍ちや蚊遣はけふもとゝろ　其立

鄙俗して百姓ものいひくちをきゝい

畑種やふきの芽も失ひて　春松
背ちゝの処不立味あり庵ぶし　我道
むしろや仮ま物て涼る桑　西耕

鍬ぬぎ汗や底平塔のかけ　素陽
なのおもや麻さ子ひとり長ひと家し　里腹
線香の匂ひの川ら牧やり弘　芳按
元日やお具も佛の旅発所　其節
九義ちやうろ紅吹すし　雲道
庭ちらさて梅の花野れ　枇杷
かとちり紅山やち解も沢ひとは　梅葉
生て死者も年ちねん像　峨流

東風吹や人いとり立を干潟　西畴
ほし初て垂るくもぶしかりくす　五朗
牡丹は菊の籬そいとけり　馬洋

畑までかとい入るうまくく　三州　山盟
ひのきなの吹すさるくに蓬　遠江　杜水
秋風やひのやうに角や牡牛　独雨
よもぎ田とよ波揺れて友木立　隆露

かくこそ紀寸めも菊の匂ひ　應居
荒ま耳澄て花れい松の声　其國
梅雪の為や乱の子七軒　青牛
ひのきうほや祝ふうす紫の雫　林峩
くくと花ゑる人の黄昏れ　文所
雁厩年雅ひのきや雪ま和　玄祐
明るまて海のうへ人ゆく友の月　陂青
世ちのうとえ色飾りやつくく　甲斐　富石

墨座とうゆる月おのおのうちれ　武藏　邑閑
木ゝしの影ちぢに搖搖の汐　為山
木のくもり拂ふて口る少ゝかゝ　四端
枯ふて夕へよりうゝ夢とつる　竹山
京洛をやれ名よゝ拂愛　支雪
江の秋の巷人て受る和口れ　湖雪
探干や淫ゝ夕を乞れて陽扇　雨弓

一枝つ磯を口ゝ形寺　孤　第六
第末や同ふゝ形ゝ軒ゝ　蓬交
ゝ人年ゝきて水ゝすゝ紙　伊三古
枝ゝ入て元日の蓬吟ゝゝ　舞雅
作ゝも新ふ中里の新菊　きく雄
ゝゝれとゝる薄人美芭れ　才湖
四月やゝゝ枝ゝ形ゝ墨変　呉城
あゝ風ゝ形ゝ大佛の峡ゝ　見外

藤原平まさ朗月やけりゝ子　汀華
彩おゝも松の音かや福寿草　等栽
くいすも地を越雪や薮牡丹　乙吟
四の入い怪ゆりゝ音ゝ乃雨　尋香
汗ふゝく用傳や柿の花　由誓

屋根丸太ハ傭入り庭の桑　芳雨
近江
叶傳一月を立ち寄て序当　如く

ゆらいゝ多焼かやもすき　乎浪
折て正く綱代ゝ音ゝや鳥の音　蕉外
ちり業をゆてれすのゝ和時雨　花六
そ川美やさき都を小松とし　湖伯
おゝの陸ハ人ゝ〇て新陸　枝雪
木ゝ〇ゝ叶やる四枝の雲ゝり　遠宝
邦のもや西の雨ゝをいゝ辛夜　雨耕
和林や地ゆゝ松の乾　梅雄

つのくにや恋ふ度ごとを垣ひとへ　田暁
母衣を中に狩て来つるれ　里雪
時ふまて青の泥干ぬや　和睦　木鶏
くれなゐて物ゝ月ゝ　雲外
おんのうと牡丹に赤紅日の出影　一卜
くれ芋の蔓ゝをれ残屋くれ　梅堂
秋ふるゝ雨も昼報や　妙法　火　琴堂
月清やまるしの名残波　烏都雄

うくいすや水ちよとれめて一言吉　月峯
しらぬちをもけすて居の霜　兼玉
都ゝ月の弾しまもゝれ　男声
うゝ秋をいそぬ月やあのゝ（ハマシ）　松月
誘ゝまて小舟つゝ居のゝ　其州
多仙や伐て見まゝ水変　巴人
戸を立てつゝ掛ゝ名れ入　玄名
人ゝて都き沙ゝ月ゝれ　文行

待宵も過ぎて猶うれ　梅井
撫の道もおぼえてのうり　真玉
居まうてむ月の人　湖支
申刻ゑ月も水ぬ水ぬ　来二
城のゆく道ハ消ぬ和ぬし　四峯
夕ぬ日へ来て消ぬや出の風　子容
吹度て激ぬ庵を覚れ　如風
きくものゝ山家ハ多きし乱茅　瑞和

仰もやゝて寄ぬ和ぬ杜鵑　梅塘
百生やハ一ぬ一枝ハよそゝろ　不抜城
去ぬて服を洗る花見れ　首雪
焼ぬ風消されて燃る枝き却　里閑
四方ハ水も未ぬ紅つゝ　淡歩
夏出月ぬ日ぬ冬ぬ冬れ　節外
ハ待寸夏をれて当ぬ知日ハ冬　千里
年おろす書ぬ入やぬ月　川三　松月

宵ごろいや京すがの塔の雫　把柳
来てうれい同一連がの小松引　流班
幕方へ突出てそうすき彩　玉童
七夕の庶て涼む竹のうら亀　宗石
西院の灯いたりなえて朧月　松月
月夜なる又人よるや一つ清水　花寿
炎を焼てうれ切籠彩　烏白
鞠の面ふ道いうれてうれ舞　梅亭

表面て一息つくや初ばし　明月
戸ごろ松明の火屑や宵のうく　甘斧
三日月年魚ふなて釣り蔵り彩　其梅
木ごり年市ごきる高の弓井彩　五雫
葬やうしいたもいたる百の駅　松花
六月の夜宮ごう立ち林のいろ　可明
月夜て地ごの雲の明り彩　奇松
松風の外ごう高の明り彩　雲英

淋々捨て床にのこるくのうしし　砺山

戸もはめぬ乱れ窮みぐるれ　雲卧　義濃

閑なりまさるる梅やゆめの孔　山士

霜ふけて有明寒し紅ほうんの　圭布　信濃

ふ梅や玄秋ふまき人きれ　惠坡

秋きしの時やたらの寺時　拙芳

うしはたるくや冷荒の時雨　秀楳

明のこる月の尖とし寒のうん　雪玉

まうもや波ひろるのいろ　拙李

踏しる岩やみるの霜凪色　仙嶽

諸時ゆとのの土橋や蔵の雪　吉楊

陰ろる松のしつくや花すれ　夢庵

雪や虫丹待るうはるゆめ　治計

下り出い清の音遠し文木立　一風

むら雨や狩りの上の田うゑる　酔雨

外のもの袖をこぼるる小道哉　幸女

破ゝ弓や去年の小風呂敷　松郭

一縣用一氏まや友寿り　世外

人寿の木の実ふる河紅葉哉　智来

埋み名を潜て来る火鼠　春水

一葉ゝ舟もかくるる一葉哉　三加里

翠ふる庵の立春の新やゝ不熟　雪峯

五月雨やうてゝぬや停車　芳宝

外ゝとまのふを四ふ言ふ哉　雀梯

神の修行雲の光るひろ引　文卿

十月や樹を形ぶる山の風　墨趣

形なるや多田明の尾ま来る　一胡

流ゝ星の光ゝ流ゝ川　一之

学木ゝ夜のまれてゝふゝ　上野　汝来

蓬ふる星坂ハの杖を庚ふし　夏市
あるうへつゆてぬ〻重の宿　菖洞
まとをつて点景ふる谷の屯　木么
ゆふ嶺や風と雲を一日金　素城
外のもや拐り今の下明り　巨川
糸ふるふ雲を又ふる柳乳　如松

獨の書斎茅の風まるれ乳　陸真　今用

まめ〻や巷の紅の屑れ残　如雲
和尚の寺山ん寺服ふ乳　仝
とおてもあつ又ふて梅の月　五雲
学のもや羽色ふ白て元雪　巴燕
ふふうてぬふふの建水ふ乳　文人
しくふや絵ふ音を傳ふとし　馬夢
恒おしまつふの年や梅塢　塘水
狭ふ杉と事を見ふ庚の書　宗古

もくもくと篠のおよぐ夏解かな　江三

撞き捨て舟こぎ出すや霧の海　沉乎

ひ分け入りたれて汗焼筋　芳山

妻子らや孤城遥て身上り　有川

陣の名に思ひも林の夕へかな　樗影

寺門やあれのこのおほろ月　一止

蓮華やとさへぐ打ちの音　出羽　南風

旅人の形ちらばるすゝ拂　素山

吟てくる人のうれしの雪　吟風

えるやうな深れま人出入　珊山

有明の月ほのぐる柳れ　月山

裏屋や樹もとゝ林さま　子温

さびく来て第一番の雨　風柯

人らけの見えて為るもの火かな　桂僻

ミすもの見と言やゝ雨の夕牧やう　雪坊

初村や森鳥まるる時の波　め春

口のあや京門を舎りひとを捕　佳風
むすぶるあをぢはしてゆえもむし　梅泉
けつそうつくしうりの方の海　峰丸
れ山へむすびて水の尾ふれ　其谷

海の鯖をひまを振りれ振てふ　越前　布珀
波の間の佐もちんの呼うれ　如積
淡雪のあるつくや柿の鮫　加賀　丹嶺

を立て振森連守ちくれ　木堂
鮫佐えのとれもそてすのも　大夢
ちくまる鮫の古いや梅の会　晴江
ふるれ孔て起ておくや月の萩　柳圭
甘斎ちなめて天に月の斎　能登　晩叙
月ぬるあ年挑灯振川冬のう　斎雄
仏袋の矢人間まや玉や大振引　猿迷
振の秋の西を手ちの森光ふ　梅村

抜やうすしていまだ陸地に
乃り付て声ばかりの鶴　茶丘
何相振い様うよりれや行鶴　小汀
木まくらに森付る数振の時馬に　日丈
出て視先くぬ和しられ　書紙
馬の歯のあまて大情熱きう　寸董
振しとそ見ぬふりや夢を扇　朱竹
牛のるま鶴をの和や大振畏　岐井

ものいろえて脚をつく事馬に　言路
しくるや花の不見も雪のうち　如亭
四のかれを引ものしられ　雅年
時馬るや戸をたす門の荒れ鶴　節来
三丈波もするまでして大振り　暢角
松をの脚よりむおかりての川　矣國
多の森る森のうりや春の月　稲波
孫内まる雲新うしてのうち　花淀

元日の詠は好り奴を作てう　奇丹
徒搏れ人ふりこの花の影　宜風
伐すてるまつの一木もいとゝ弘　甚玉
家子新涼ふるてもれ庭ふし　李琴
はれ雲や洗はれおく枝の月　以池
山風の吹寄せ嶋のいろ乱　馬与

語も四十帯奚ぶり腹奚ぶり　越中　禾汀

雪も晴を待つゝ初日の出　芝亞
夏元まてうれて奚ぶり弘　依山
門出て冒ふるうやはいん係　迩江
貧しうや家ふ作寸麻の衆　有丸
西と東のつくゝもえ広られ　学衣
蓮華や鶏の生る古ふら　草窓
立秋の川涼えて鶏匹弘　定爾
ふる雲やえやる牡丹八青　子遥

翁業や年にかくれぬ名をすて　桐栽
伐る木のかすはやきて枯尾花　洞雨
春すれば元の幹にも和俗　咸休
ちるを見て風吹られて井の枝　休商
出すまでや梅ヶ枝の声　彌遠
うめのや思ひ這入つちる　抑江
翌とふ市日待ぬ初月夜　梅亭
人ゝ忘れはやゝ立まふ曇り哉　寛陽

行雲の内ばかり消て残のゆき　徐素
栗のもちやゝ埃の内る水　梅年
一回つゝ音を打ぬ春の雨　芦江
木ゝ〳〵ゝ友ふる山　焉　多哉
垣一重隔ぬまでて咲牡丹　桐芳
麦秋やけしらる月を照のゝ人　芦郷
拾ひて直のよくゝ名日今夜　士孝

いつ[illegible]や憩を敷きて橋潜ミ　越后　乙良
浮[illegible]多や芦の葉の原　好静
護摩堂の上かすミや花の雲　五具
孫[illegible]重藤のゆくすゑ　里仙
日の影を抱て冬山や　筏の山　古棠
言い木の梢ふるし春のうち　志扇
言い木のいそくおのや和歌　麈妹
思ひ入ものや西方の山つき　茅山

佐渡
[illegible]ものや隠れてもすき　收之
金山ひとも[illegible]号の口ひろ　樹之
時を過ぶて[illegible]くと豆腐や雨のゆと　朶仙
ひの花ぶを枝さしと[illegible]ふ大串小　斧刪
色見てもうれ[illegible]を橋口の[illegible]　有翠
屋[illegible]を出て四[illegible]ふ小名小　巡仙
[illegible]られて音の[illegible]ふ[illegible]と　谷守

人丸の京師なりや天の川　鑒子　丹波

ふりてなる雁なきなりや川・柳　幸逸

我手枕のたゝぬ森見やる　規　桂眉

投入てうゝの桑門や寒き　其栗

えくゝ屋をきて拵ぬ夏炭　風所

黄ゝやロのすちむる岩のうへ　南張　但馬

せく塚ゝ分てロゝ　南岳　因幡

戸口ゝ埋を見通しや麦の水　市風

庚ゝ振出る旅多しはるの風　一有

一口ゝ隆ロもゆるや花のうち　省雅

やゝ人も祝のうへとまめ孔雀　天寿

ゝゝ付ゝ道ゝふ通る蒙えゝ　社蒸

ロ降やまゝ出て来ロ十雀　三芝

麦ゝゝ平てやゝぬまの雪　其貞

投ゝゝまても明ゝ能乃雪　西畴

なるもとうふ中ふるかたちう　花屋
梅のうへ　野てあるしつる　宗納
四の高てかふもふ四の日永　固乗
木尾や本ふ名ふてあつう　小溟
雪てまて考ふきふ多のう　芹水
行旨のうるうるもしうふの月　稲叟
ふる一里市べ四のかう野の秀　郁塚
うりい消るやうかう知ふ　巴大

ものの和と乃もたをいつ弘　雨節
屋島や厚薬なるてあのう　伯春
川舟や蒲澄のうへのちるの月　一兮
さくて西つふかうやちふの実　南朗
きくるる汁をあのうれる　葛石
声のかてゆうる好ふの風うふ　蓬城
常越てかうの迫るつき年　巢明
経て遅て大いのとふかちる蔦　汲敬
　　杉樵

杉たてやそまの斧の打朝ごとに　百年
西解て打つ大瀑の下ゝ水　鈴春
武庫山下かゝりて雲の秋の雲　久米人
寒し十数といふ雲の玉　清因
きゝの岩ゝ家ゝ井の井　桂湖
しら雪の波まちる西地分れ　樹聖
柿赤ますまていふるすれかな　清呼

波濤をかしこおや嵯ひとゝ　雀庵
海原をおもふ秋の不ゝる　陽和
唯強て何おもふ日くれ　抗該
ものの数ゝても伐や春の梅　鷺汀
ゝ数や村を見し春の言　我童
見ゝゝの村の変ゝる春ゝ　有像
出ゝ数まて山ゝ孔ゝる初日弥　松高
ゝ数ゝ吟や門いまる初ゝ竹の吟　龜子

こうばしや夜ごとに為の家　呉仆

梯と山へ口ごとに成りゆく　桃蕊

寒梅やひらい案内かれ友ごとに　十海

足のうるひらい枝ひらいて　河香　馬仏

山鳥の子を連れすや木下蔭　石見　吐花

嫁をして加賀の梅植れ　鶴雪

音引て夕ひおちるかりがね　奥躍

旅人の袖ひるむや茶のうへ　真山

初秋や馬の帷子拭て干す　素池

明ふりや雪まかり秋の音　碧園

人ごとの見てかふ梅の香　文莊

荒ゆくや火鉢も似の雪の径　卜憐

播磨

懐ひとつをすりまる蔵れ　巻山

いなつまや月の出沙弓曳り　松雲

まる月や藁斗飲て形まる紀　仝

菜のもや花の弁てのつぼ株　松巖
蔵水や底へ雲へ隠れけり　素雪
ちく林や留主の板る舟上り　物雄
木のうろや雪もちらやもり中　盜梅
鶏鳴ふ寺風もたえ雪の声　柿玉
川紙や茶家袖を肩のうへ　珠跡
撰れい狩たしなまれやおるの日　傾中　一玉
ゆれ見えと指さす雲や夷の家　東嶺

みのもや秋のうつる花の蜜　長峯
学も言ちまさ入き行素嵐　卜山
ふこよ事人をおるや后のう　小槌
茶仲の素雪小風の自明乳　磬友
山いのり引秋や粉の学乳　松緑
形ふ物乃ふ怪やすき原　杏丙
初東風や形ゆえ樹の紙　為兵
新年や鶴日元や鶴の貝　姫孫

安芸

波いさてひくくりの特産　甘古

あくく脚をきくてるるのか　程表

ゆそかれつ遠くくるる花の友　木居

菓のもの底まいるの古栄か　古徑

拓くくるる佐やちやうくい和　雀村

きれゆやくくて上る穀のくく　梅卜

因験会やくるのくるの通てぬく　鳥藻

二郎平くるや栄のあくく　木公

四中おくすくて出てゆく宵のく　凡扇

橋くくうて谷のけくぶか　一貫

ゆゆの屋の振掛ひくく一墨　方夕

ゆくけれまくまくりて女郎を　松泓

紀伊

梅市や雇くく届くはり水　芳翠

きくくくくくやれを教かくく　南淡

日の暮て宵こゆるそれ　雪圭
宗うのよ紅葉書やおちぶ　石推
出来て詩句吾れまかしぶ　懐之
あるの一ぶりや江の日南　文涼
初月のつくり月や雲ちきれ　呉雪
風雲のうへ月のりねん像　桃仙
毎のたを人の修そ月の秋　百雄
鍬やめて指さす方や赤と梅　小岳

塀やめて寄さ寄やあ庭よ松の声　秋花
梅ぶを風の吹き小雨ぶりな　桃秀
ゆ月ぶり雲ハ学の寒ねれ　茶梅
月ぶ夜ぶ交て出てる柳ぶ　柳女
小降や鳴て小ぶのいちむ声　吟子
小夜て冴て冴ぶ麦の色　牛良
きぶ〳〵と星の明りぶ　写柳
外の音や寒れの庭ぶ夕月夜　素雨

五月雨や井戸もつるべもふるびぬ　除松
関も際も月に隠まやたの風　京女
移き来て烟立むせるちまり　李渓
鶯の声おりや蛙の音　李枝
人伝にきく蛙さやかにくる　李堯
ほやめて吟入夜の秋ふる　桃雄
黄昏に見おくれし柳陰　杜伯
永上るかなほる掘り　桃投

稲妻や水にうつる物　桃可
風の外や蚊の行る　板庭　桃葉
荊に星月むすぶ虫ふる　布青
むしの通り家の高もる　桃赤
山陰の行のかの名月の掛　俳花
雲の紙衣ちる言のいつの間　竹里
ちり灯を消てもて好夢ふる　無甫

旅の筆の跡もとどめ　燕雨
名ゐ高い水もつるや天の川　楓亭
曳きうゑて植ゑる小松哀れ　南園
年々と地風荒て荒の春　阿波　鳴橋
名を写て杖はひらり寒ち　茶像

茅屋

桃の茶や門もとりを見る牛　茶雷
耳打ちむしいはれしかはの奥　松丈

思風
楚丈
夷岳
爭路
龜手
史白
一史
栗二

蓮の花て茅ゑのつくりつゐ
茅い植ゑ生るかまりや杖のを
羽ひきも捷の中や大矢数
明るも揉ゑてゑる松ゐ
年時やよその山ゑの寺ひよ
朝志ゐ小ゑも鳴る彩樹ゐ
明き来て畑てうんとの焼ゐ
宗阿もや寄せ杖ちゐ朝の色

ちつ夏のかと　も一枚と思いけり　柯涼
人いまる外ゝのつゝひて城のゝ　羅邦
人の服をはつて学ゝ嘴鶯　文釜
初雲や伊ゝ奪ゆきまま鳥　天馬
明りや空も霧ゆ燒ねゝ　色松
鶯ゝて頃ゝてゆゝ山の赤　月古
木の芽の窟廣て春小春　語卿
高山の服ゝ明ゝ杉の風　石居

ゝれて月百の光や軒ゆめ　平蕪
麦の植平明ゝ屋やけゝ　雪瓦
起ゝの服ゝむ毛や白牡丹　梅水
陽ゝゝ夕虹ゝ山根れ　赤梁
杉の根いなれ流て宗古ゝ　煉化
小仏やまつゝ侍ゝ一ッ石　一到
京ゝ春の橋を越ゝ風の舟　宗閑
乾ゝゆい奴ゝ日や奴き学　古一

春柳や京の人へと結のこる　梅寸　土佐

二見にて

賞ふ人の日暮てちるや櫻貞　對州　讃岐

咲くらつゆ下に散るつのそ沙　庶藻

ふまてい御もかく長松の梢　林多

散くるもまらてあるは下帋　仝

松竹も見分るうめのちりぬ　梅林

焼うるや菓の匂考いゆの野　半直　伊豫

夜の明て高見仝すやすら拂　坡堂

ゆるぬ出すゆ一すもゆ初のつ　熟翁

学や学と沒めとらいるかん　見宗

彩てるる如木のるよく出て大根畑　蘇如　豊後

ゆれ花のの子ゆ枝空や鳴る蛙　琴多

一年のゆて義もかい和歌　九成

神々枝義きるれいうめのも　嵐里

若いなや五月雨のうゑ初めり　唐枝

竹のうや去年の竹えて掘をこ　四向　昇々

ふ竹へもまた照をうしまた　やす女

秋うさうのうつて青田風　天章　成城

素竹や屋の朝顔の山垣り　森潮

遊歩

藤て咲き雨の竹相いても　波月

抜れうも見ふる出るうるる　桃子

まの秋やふ竹ふうき咲　所指

麦きしやく松まく伐き桑の山　立冬

赤傘や蕣一ツ稲の井　鳥岬

物受て根つよく青や山の色　素竹

ま竹や川を埋しと野青　兎角

見おとの赤よりくやの月　春化

黄雲の色まくさ尾花風　清井

水沼ちも寄て神見　寄哉

迫江藤や夕田の鳥の声を　拾山

寒雲や雪一抱の山もとり　素破

高く咲く牛木やうつくしき東風の音　桂張

うるおひやあるつくまで傍の入る　森川

当国や蛙し好の弦仕盛　史山

夕風や枝茅の中のうつき貝　徐良

細雨や花平おいて京めぐり　玄子

追加

分れ入る楼延ありて行くの苗　日向　双鳥

枝ばかりや思ふ梢も焼のよる　伊勢　彩岐雄

柳陰掛やめ居キて泳ぎり　武中　水哉

桑平野の色兵部めて梶米　阿乙

行も思ふ月を望つの好の西　茶屋

夕好の立や狂未の時西の色　雅雪

菊や垣より立て戻る夏　爽雨

雲近くふてゝまた秋風や植木屋　信濃　槐叟

秋風や鯛なき網の残り香　吟江

凡ゆも尾を巻く蓼の白さ　金剛

岩たゝや有と斗のもすそ色　尾張　思文

江の村や埃まうる桃の花　市雪

凡変て蓼の遠ふ横うれ　馬釣

何変と好く水音弦月の毒　吟之

蓼うとて摩ゝ計金子落花搖　上総　政二

木のもとゝ又塑の陽丸やわあじ　有節

池畔をたゝ寸ゝの緑毛　梅通

出雲い月枝をゆてゝ来て　馬楽

ゆうゆてすゝふ泥の泡り井　節

志ゝぶゝ凡ゆれとゝも蛇いちと　通

夏鉄炮のいとい音する　雄

と結ぶる後の長ふたぶ度宣なる四　節
春めくとせる岩山の姿　通
まやるのて常世めぐり　雄
夏りの雲て神乗る合寸　節
炭ゝ沢の出て立ぬの雲しく　通
角力をとる数方をしうる　雄
隙沼の仕舞て月の雲迄　節
桜のゝ川も砂木れうて　通

市通りやうます花と人少れ　雄
庭を掃て上る庭　等　節
埃地瓦ふ瓦をもる音きて　通
只きる葉を掃てとやる　雄
岸入ゝ付て来ゝも多りたき　節
このゝ形きぬ師の大兵　通
庭すれのつゝ船ゝ数　蔭てゝ　雄
足初の牛の漂ゝ船き来る　節

今とゝ加茂玄蕃と砂丘て　通
雨音の風に樗ちる時　雄
入れて波辛へ実多古まき　節
むらうさと返す仲人　通
見ぬくひを風に洗ひそ　雄
まさ生ぶしき振袖の余　節
一里塚より辻町の月よく　通
皮り尚せのやのまし紀行　雄

賽銭の炉い為る木のる附　節
よこす寺ろ玄蕃ふのきる　通
破伝あるつれて風邪ぬ吹る時　雄
ひさしく市場も鐘ゆ寄る　節
まる咲てゆるのこ捨しもの枝　雄
伝川と速見まつる炉塞　通

宗阿花の坊を尋ねて外の面

有節

友を訪ねて門に立つる　雨翠

過一里交代時の花を顧ふて　節

孫子ひろふ西梅を出す　翠

京邸子の物むし盥を浮まり　節

仏に師走の仏忌　翠

夫婦くに対する老人も　節

秋吹くて山形の顔猶　翠

抜すての山形たる蘇のも　節

主のふまれの物を宮の秋　翠

秋椿てもふ山まる宿の元　節

小理屈いはる祖父の機つ　翠

月の出るまでを修く撫まり　節

ものの樊大まる姉の妹の妓　翠

のりつぎを互まいそく行帰て　節

築出張はんこむ　翠

阪内の法隠もおそくむ重り　節

通るうの御るを川虹　翠

子供の歓路るるの日の水作

何てもおるる雇の作雑節　節

無引も知る喧花の口利て　翠

夕方の雲年神楽はやめる　節

まだ上る扇子名のかるる形　翠

所おおれてつゝま風呂　節

飽るも形れと恨いすて　翠

八坂の塔子教的おろく　節

煙立軒年イむもの炎ひ　翠

於ふてからの対布つゝく　節

ひつそりと出ての月の新汐て　翠

出ゆくまるる形の虫ら毛　節

宮の橋くゝ幸て祇園ゝ詣ゝ　等

笠履借りてゝ厠戸　節

いや丑刻ゝ時やらつの人泥て　等

夫の糸の木は強く風　節

冷つまも匠ねと花の冠ゝ　等

のかりをふきく糸のかゝくゝ　節

時雨くゝ庭の一隅時て行の音

小松斗の色も出る　春　社雀

数入の足も花瞬のつまゝて　節

ほし〳〵ちゝ沙の〳〵ほゝ　雀

はや金沢年の高くゝ啓の月　節

契ゝる月逢まを口ゝの汀　雀

有節

京の花も出盛るつる屋作り　節
初鰹の衿のいろむ餅柄　雀
見られて脚をうちもうの空　節
うりの空清たる焼ちゃよ　雀
気のおとす暑さしら沢の山や　節
柿木をかくれ夢のいとり　雀
腰よりす捧も月夜の大威し　節
踊を好れいよい踊のうち　雀

多い子千信の作くつ使ち　節
下駄うしかふてそたふうろく　雀
めんやられ花のちうの成寄定　節
除す代千すれて引所　雀
うちゆきよ二日条の扇めをて
沸く兼千屋根の左衣嶋号　節
張云千少て形ことうふ表　雀
道抜きうきき原川の姿　節

風のたゝるてハ咲て来る　雀

神門（トリイ）もたてる孫位の唐茶瓶　節

馬刎て羽蔡侯の人形哉　雀

切れる居酒やまうかとさす　節

もちゝと件奏者の氣味のよし　雀

まゝ小山の接度持て来ぬ　節

才一の月見る虎いあ為て　雀

実もそのまゝうふかれる毎　節

夏午つく光ゆてゆもちゝ　雀

淡ふて通る矢湯の皮達　節

ふて好ユ夫のゝる好ゝ茶　雀

嗽の接を居る狗氣　節

四のちきい花のしつくの美き　雀

洒布やしおく為意のうゝ　節

厚まぬはなよりはしまやまの月　蔦雨

まくるもはらぬ去年の塩烟　有名

一ぢへ考ひ厳　蔦雨

世ぢのゆめのもさつふやく　蔦雨

月うく蔦の秋持音のすき　雨

蕾うこめく草市のゆと　蔦雨

ひつまも係生世乃結　裕雨

砂の蔦おのれ通て拭　蔦雨

線まて仕切り附刹ぞまやり　雨

泳めほとよ紀志蔦所の雪　蔦雨

はやは変ちかぢる変をいやぢる　雨

うろこ人ますうろ逐い子　蔦雨

月をま槍ヤライ栗掛へ　掘蕎清　雨

ふふとく初の刺氣乃白尺　蔦雨

素門高も秋際やうけとき　西

大師のみを皆ゝ服まぬる　節

一日も寄りちらいぬ花ちるを　西

塚の来てかく蓮の酒の点　節

終路ふいたりもたゞぬおるむ　〃

黙て居ぬい吃の生ひ　西

古実のゝ知れと狩る矢の乳霧て　節

まて暗くれ志ゝ夕立　西

浅間根いすゝて不二より乃ぞ久　節

同業連の小角舟をぬ　西

ぬふるのよりて出て来ぬ女子古　節

後形の橋のいろくろ　西

伊勢理のあま社門の達嘉也　節

書のいろねとふるらく出　西

冷やりと月ハ貫まて入おくれ　節

畑紙ふ袴つゝの下　西

ゆしのひよ鶯流る弥きぬ鶯哲　花

まゝ剣ちらし袖の月の色　西

薄地を重てうしゝ大抹木　花

月玉のゆる風呂の熱技　西

思ひまうる花の山ゝ　花

時ゝ鳴ゝ雲　西

ゝ家の中ゝ音すむ風れ家　半窓

小松年ゝ川むゝ有ゝの新　烏谷

皮ゝ乃庶ゝのすゝ切ゝ定めて　披雲

度ひのゝ住ゝ乃ゝ　雷

撥乃ゝ牡丹畑のゝ　谷

姫刎引する撥の青ゝ　雲

片耳をいとしく思ふらしと　重
人の笑ひて我慢悔する　谷
のこやうて思ひ毒ひ茅なり　重
やうのてくるふ前へ越す　重
杖二本遣て法螺をひし薪　谷
ものゝ本いいふ大神のくを　重
為のる月より生吹明やき　重
猶まちの新　秋白の編　谷

仙魚釣のふ夫人を借よ来て　重
喧嘩いい閑寺迄うへの仏法　重
匂ひ立不二の新四を年の花　谷
ぶりぶりと赤裳ひける茅茶　重
学ひ囊まて人のすておろし　重
拾童はやき一房掠の打　谷
立の月る祝変の焼ひ　重
新鮮しろま男ひすむ　重

貫ぬ寺の柱木もろとも開花て　岳
風もこのをるまの吟ぶぬ　風雅　重
枝見てかすふ屋敷のまつもと　重
やうやうそつる身をやるを形く　岳
渦の流る志賀の浦へ落ちをを　重
梶の葉なりうまの落に色残　重
弓張の月い寒山の矢はきの吟　岳
おつ形立てもとる葬物　重

家振りへの捩り湊は脈を示紀　重
人間意味つのう形吟ゆる　岳
梢畫をかく高い梢を釣ゆて　重
吟するもの通る科主　重
枝は淡地ゆきい花の世と家し　岳
明てゆくる妻のたのしさ　重

桃乙

おいたちのうへまれなる山の水　仲良

炉ふちのくの冷る夕暮

もろ〳〵反故撰歩はもれ　乙

旅しさ人の旅をすめる　良

音きこし天竜のつく月の秋　乙

ちゝさの稲を扱る口の孔　良

祭りとて網も鎧も出のうひ　乙

新宮の家千国の口の後家　良

許しとて傾て傾子千指の元　乙

付假に来ていふ歌る青梅　良

犬の子のなつる袴千起ゆう　乙

何ぞもしら雲鉄炮　良

庭の子月の夜尚まむりきて　乙

角力の見頃ゆくそいさ踏る　良

れぬたいうそし寄れ舟の中　乙

斜平えやる若こころの松　良

むしろ敷る里はゆくるの若うまえ　乙

低き垣根をつふ清峰　良

跋

きく人のすゝとるくゆそらとゝひ吉野よく
見くよる紀人くみつと淡なひ西歌のゝを
俳諧よ哲ふ人くるくかくのされをよきく人のらく
云かなせる發句を閑もることの為ひくくゆきまこい
井くよひのくゝ侍事のこ為てたとひ百人
等陝に発生もるとゝ沙を大悟者をおもつ
なゝ山をハよくゆ閑て学んこと五仲起人の

日ぶきこゆる河ぶねの新しき蓆に人まちがほなる
秋をしらせと思ふ色をえらび特のせられぬ揚ぶねいま
天下其国をおさめ青かやらぶるく蓆新集乃
蟹ふりて流れ今多八潮に乗りおそ又きくのそく
思てらんよ彼の山氏家乃ぬく色もやつきかれ

六源国桃乙後

南紀　文源書

新水　甲寅冬生日

京四条通寺町東入
御摺物細工所　湖雲堂
近江屋利助

富田藏書